

試論 「身を立て名をあげ」の現在

— 「仰げば尊し」・「音楽」教科書・「唱歌」教育から—

田中 克己

キーワード 立身出世、「身を立て名をあげ」、「仰げば尊し」、「音楽」教科書、「唱歌」教育

序

本稿は大きく三つの部分からなる。まず第一に、最も新しい「音楽」教科書における「仰げば尊し」の掲載形態を分析することで、今日では〈身を立て名をあげ〉にマイナスのイメージが付与されていることを明らかにしようとする。第二に、「仰げば尊し」の成立過程に注目することにより、今日考えられている〈身を立て名をあげ〉＝「立身出世」と「仰げば尊し」が誕生した明治期の〈身を立て名をあげ〉＝「親孝行」の間にズレがあることを指摘しようとする。そして第三に、戦後の「音楽」教科書において、〈身を立て名をあげ〉を含む二番の歌詞が削除され始めた時期の学校教育をみることで、〈身を立て名をあげ〉に付与されたマイナスイメージの原因を究明しようとする。最後に、今後の研究課題について述べたい。

1 最新「音楽」教科書における「仰げば尊し」

1.1 今日の「音楽」教育とは

この章では、小・中学校の最新「音楽」教科書（平成13年検定）における「仰げば尊し」を分析・考察していくが、『学習指導要領』が述べるところの「音楽」教育の目標をまず知っておく必要があるだろう。

新学習指導要領（平成10年度改訂）における音楽科の「第一目標」には、

・表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

（「小学校学習指導要領」平成10年文部省告示第175号）

- ・表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、豊かな情操を養う。（「中学校学習指導要領」平成10年文部省告示第176号）

とある。更に、上記の〈情操〉とは、辞書ⁱⁱによれば、

【情操】《名》①情感やゆたかな心。また、その動き。②道徳的、芸術的、宗教的などの高次な価値をもった感情で情緒に比べてさらに複雑な感情。

とある。つまり簡潔に述べるなら、今日の「音楽」教育ⁱⁱⁱとは、「音楽」という活動を通して、豊かな心の動きを持つ人間を育むことを目標にしているというになろう。加えて、旧『学習指導要領』（平成元年告示）と新学習指導要領（平成10年度改訂）の間には、教科の目標については、小・中・高等学校の一貫性を図ることのほかに、学校や地域の特性、子どもの心身の発達や実態等を考慮し、各学校が弾力性に富んだ指導を行うことができるように配慮されているが、音楽科の目標については基本的な構造に変化はない。

1.2 最新「音楽」教科書の分析対象と内容

それでは、今日の「音楽」教育の目標と「仰げば尊し」には接点があるのか。最新「音楽」教科書には「仰げば尊し」が掲載されているのか、という疑問が生じてくる。そこでこの節では、小・中学校の最新「音楽」教科書における「仰げば尊し」の実際をみていく。

平成14年春の新学期から使われている「音楽」教科書は、小学校が3社（教育芸術社・教育出版・東京書籍）、中学校が2社（教育芸術社・教育出版）ある。ここで扱うのは、「仰げば尊し」を掲載している、

- ・教育芸術社……『中学生の音楽2・3下』①
- ・教育出版……『音楽のおくりもの6』②／『音楽のおくりもの2・3下』③
- ・東京書籍……『楽しい音楽6』④

における、(a)掲載形態・(b)目次における分類・(c)標題の表記の仕方・(d)出典(作詞・作曲者)・(e)注、の五点である。以下、その内容を示す。

- ①『中学生の音楽2・3下』（教育芸術社）
- (a) 〈互いにむつみし〉から始まる二番が削除され全二番の歌となっている。
 - (b) 欄外に載せられているので分類不明
 - (c) 仰げばとうとし
 - (d) 作詞・作曲者不明
 - (e) いと疾し（たいへん速い）／別れめ（別れましょう）／なれにし（慣れ、親しんだ）／螢の灯火、積む白雪（「螢や雪を集めて、その明かりで勉強した。」という中国の故事によるもので、一生懸命べんきょうすることをいう。）／ゆくとしつき（去っていった年月）
- ②『音楽のおくりもの6』（教育出版）
- (a) 〈互いにむつみし〉から始まる二番が削除され全二番の歌となっている。
 - (b) 音楽ランド
 - (c) あおげばとうとし
 - (d) 作詞・作曲者不明
 - (e) いととし→とてもはやい。／いまこそわかれめ→今こそ別れよう。／なれにし→慣れ親しんできた。
- ③『音楽のおくりもの2・3下』（教育出版）
- (a) 〈互いにむつみし〉から始まる二番が削除され全二番の歌となっている。
 - (b) 音楽の広場
 - (c) 仰げば尊し
 - (d) 作詞・作曲者不明
 - (e) いととし…とても早かった／わかれめ…別れよう
- ④『楽しい音楽6』（東京書籍）
- (a) 〈互いにむつみし〉から始まる二番が削除され全二番の歌となっている。
 - (b) 音楽の森
 - (c) あおげばとうとし
 - (d) 小学唱歌集より
 - (e) 注ナシ

以上から、最新の「音楽」教科書における「仰げば尊し」の形態は、〈互いにむつみし〉から始まる二番が削除され、全二番の歌となっており、標題の表記については統一されていないものの、小学校用では「あおげばとうとし」と全て平仮名で表記するのが一般的であり、出典については不明、もしくは『小学唱歌集』より、という形になっている。また、〈いととし〉と〈わかれめ〉等に

ついては、注として意味のみ説明があるものの、文法の解説は見られない。また掲載学年が各社ともに卒業学年であり、東京書籍版の『楽しい音楽6』を例に挙げるなら、小学校用にも関わらず注が一切ないので、歌詞の内容を深める目的ではなく、卒業学年用の教材（楽曲）として「あおげばとうし」が掲載されていることが確認できる。

1. 3 二番の歌詞削除について

さて、〈互いにむつみし〉から始まる二番が削除された理由については、各社から以下の見解が得られたので、ここに引用したい。

- ・特に『身を立て名を上げ、やよ励めよ』は、当時の立身出世が前面にでており、一人一人が自分の良さを生かして社会に貢献することが求められている現代の価値観と合わない。歌詞の内容説明が非常に指導しにくい。などの理由で2番の歌詞は削除しております。いずれにしても「こそ…め」の係り結びの説明や「我が師の恩」「日頃の恩」の解釈の違いなど音楽の一般の先生にとっては、指導のしにくい内容と思われまます。
- ・2番の歌詞が立身出世と解釈できる場合があり時勢にそぐわないとのこと意見が教育現場を中心に数多く寄せられたことがございます。
- ・時代に見合わないと編集委員会が判断した結果です。

各社の見解を要約すれば、2番の歌詞〈身を立て……〉は、立身出世が前面にでており、現代の価値観と合わない、また、2番の歌詞の文法や語の意味を現代の子どもに教えるのは非常に困難である、ということになる。このことから、2番の歌詞、取り分け〈身を立て名をあげ〉は、「立身出世」を想起させるためにマイナスのイメージが付与され、今日の「音楽」教育の目標である〈豊かな情操を養う〉こととの間にズレが生じているということができよう。また各社の見解において、今日では〈身を立て名をあげ〉＝「立身出世」という図式が自明の理としてあること、歴史的に「立身出世」が推奨されていた時期があると考えられていること、の二点については注意を払う必要があるだろう。

2 「あふげば尊とし」誕生と中国古典「孝経」

2. 1 『小学唱歌集』とは

この章では、前章において導き出した今日考えられている〈身を立て名をあげ〉＝「立身出世」という図式が「仰げば尊し」誕生時において成立し、かつ

推奨されていたかを探るために、山住の分析¹⁴⁾する作歌過程をみていくが、「仰げば尊し」が初収録された『小学唱歌集』について簡潔に述べておきたい。

文部省音楽取調掛編纂『小学唱歌集』全三巻（明治15^年—17）は、小学校・中学校・師範学校で全国的に使用された最初の「唱歌」教育用の音楽教科書である。明治4年の学制では「唱歌」（当分の之を欠く）とされており、文部省には、その授業を開始するための準備が何もなかった。明治12年10月に、伊沢修二（1851—1917）の尽力により音楽取調掛（東京芸術大学音楽部の前身）が文部省に設置され、国楽（ナショナル・ミュージック）創生のため、まず小学校唱歌教材の作成にとりくむという方針がたてられ、この方針によって刊行されたのが『小学唱歌集』であり、その緒言（『初編』）において、伊沢は、「教育ノ要ハ徳育知育體育ノ三者ニ在リ」と教育のあり方を述べ、「小学ニ在リテハ最モ宜ク徳性ヲ涵養スルヲ以テ要トスヘシ」と指摘した上で、「音楽ノ物タル性情ニ本ツキ人心ヲ正シ風化ヲ助クルノ妙用アリ」と唱歌教育の必要性を述べている。また全三巻合計九一曲のなかには「仰げば尊し」の他に、「見渡せば」（後の「むすんでひらいて」）、「蛍」（「蛍の光」）、「才女」（アンニー・ローリー）など、長く歌われる歌が多く含まれている。

2.2 「あふげば尊とし」の成立過程

山住の分析によれば、作歌については、大概・加部巖夫・里見義の合議によって行われ、標題の「あふげば尊とし」については、「あふげば尊し」→「師の恩」→「告別歌」→「あふげば尊し」→「イキル」→「あふげば尊とし」の経緯をもち、〈身を立て名をあげ〉については、中国古典『孝経』にある〈立身行道 学名後世〉からの借用である。補足として、歌詞の原案と決定稿を以下に挙げておく。

- 一 あふげばとふとし、わが師のおん、学べるうちにも、はや幾とし、おもへばいと疾し、このとし月、いまこそわかかれめ、いざさらば（原案）
→ あふげばたふとし。わが師の恩。教の庭にも。はやいくとせ。おもへばいと疾し。このとし月。今こそわかかれめ。いざゝらば。
- 二 互いにむつみし、日ごろの恩、わかるる後にも、やよわするな、身を立て名をたて、やよはげめよ、今こそわかかれめ、いざさらば（原案）
→ 互にむつみし。日ごろの恩。わかるゝ後にも。やよわするな。身を立て名をあげ。やよはげめよ。いまこそわかかれめ。いざゝらば。
- 三 朝ゆふなれにし。まなびの窓。ほたるのとし火。つむ白雪。わするゝまぞなき。ゆくとし月。今こそわかかれめ。いざゝらば。（三番修正無

し)

以上の作歌経緯から、「仰げば尊し」に込められたテーマは、「師の恩」・「告別」・「イキル」であり、2番の歌詞部〈身を立て名をあげ〉については、『孝経』の文脈（親孝行）と同様な意味での解釈が必要ではないかと考えられる。つまり、前章において導き出した今日考えられている〈身を立て名をあげ〉＝「立身出世」という図式と「仰げば尊し」が誕生した明治17年における〈身を立て名をあげ〉＝「親孝行」という図式には格差があり、今日の〈身を立て名をあげ〉は、「親孝行」という鍵概念を飛び越して考えられていると指摘できる。

さて、ここで中国古典『孝経』における〈立身行道挙名後世〉の文句について、もう少し詳しく述べておく必要があるだろう。〈立身行道挙名後世〉は、『孝経』の「開宗明義章」第一に見られるが、その段の文脈¹⁹は以下のとおりである。

先生がおっしゃった。一体、孝行というものは、あらゆる道徳の根本を為すものである。教化のよって生ずる根源を為している。まあ座りなさい。わたしがお前に篤と話してやろう。わが身体は両手・両足を初め毛髪・皮膚の一切に至るまで、すべて父母から戴いたものである。いわばわが身体は両親の遺体である。この大切な遺体を善く守ってわけもなくいため傷つけないように心がけるべきである。それが孝行の始めというものである。人として立派に成長し、正しい道を践み行い、名を後の世までも語り継がれるように高く揚げて、その上、だれそれは誰の子であるよと、父母の名を世間に広く光りかがやかせる。そうすることが、孝行の終わりというものである。終わりとは、成し遂げることである。いったい、孝ということは、まず第一に家において親に真心をもって事えることが始まりとなる。出仕して家を出て君に事えるのがその中間に位している。身を立てるとは、まず孝に始まって、次に君に事えて忠を尽くすことができ、始めて立派な人物になるのである。ここにおいて終わるということは、孝を成し遂げたという意味である。

『孝経』では孝行を道徳の根本としているが、上記の文脈にそくして言えば、〈立身行道挙名後世〉とは、孝行の最終段階、つまりそうすることは、もっとも親孝行をすることになる。こうした考え方を、「仰げば尊し」に適用するならば、2番の歌詞〈身を立て名をあげ、やよはげめよ〉は、親孝行を忘れず

に努力せよ、という解釈になるのである。

2.3 明治期における〈身を立て名をあげ〉の有効性について

さて『小学唱歌集』の作成に尽力した伊沢修二の自伝³⁰に、以下のような記述がある。

立身行道挙名後世以顯父母孝之終也とは、実に我日本国民の至情であって、真摯に勉学する書生の努力の目的中、其重要点は実に此所にある、況んや身はく遠異郷に遊び、文物制度風俗習慣の全然殊れる天地に彷徨ひては、頭を上げて西の方落日を望み、或は四顧闐たる時、故郷の光と同じき月を眺めて、故山に我が成業を待ち詫び給ふ老親を憶ひ、為に腸断たんとした事は幾回であったか、所謂錦衣婦郷の歡樂も、白髮の老親家門に倚って待ちませばこそ、若しそれ帰期を失し、老樹風折せんが如きこあらば、泣いて斜陽原頭に成業を告ぐるも、幽明途異り、声達せざるは如何とも仕難い、然り、余の乗れる汽船が、横浜を距る六日程にあるの日、父は溘焉として長逝した…………。

この引用部は、師範教育視察と学科取調を目的とする師範学科調査委員として伊澤がアメリカに留学をしている際に、父の病気が悪化したとの急報により、明治11年5月に帰国した時の回想であり、引用中の伊澤の言葉、

- ・立身行道挙名後世以顯父母孝之終也とは、実に我日本国民の至情であって、真摯に勉学する書生の努力の目的中、其重要点は実に此所にある、
- ・我が成業を待ち詫び給ふ老親を憶ひ、
- ・所謂錦衣婦郷の歡樂も、白髮の老親家門に倚って待ちませばこそ、

は、まさに明治後半の立身出世観の代表的なものといっているのではないか。加えて、下線部が完全に『孝経』を踏襲したものであることは、述べるまでもないだろう。

伊沢は、明治3年に貢進生として大学南校（東京大学文科の前身）に入学、2年後文部省に出仕、7年官立愛知師範学校校長、翌8年に渡米、11年に帰国して東京師範学校校長補、翌12年3月校長、同10月音楽取調掛設置とともに御用掛、19年文部省編輯局長、21年東京音楽学校の初代校長、と輝かしい経歴を持ったエリートであったが、明治期においては、『孝経』の文句〈立身行道挙名後世〉は、どの程度流通していた言葉なのであろうか。

『孝経』の文句〈立身行道挙名後世〉は、小池が指摘する⁶ように、「修身」教科書である宮内省『幼学綱要』（明14・8・2）⁷に見ることができる。『幼学綱要』は全七巻からなり、徳目が各章の初めに次のように掲げられ、

孝行第一、忠節第二、和順第三、友愛第四、信義第五、勤学第六、立志第七、誠実第八、仁慈第九、礼讓第十、儉素第十一、忍耐第十二、貞操第十三、廉潔第十四、敏智第十五、剛勇第十六、公平第十七、度量第十八、識断第十九、勉職第二十

それに続けてその徳の大意が説かれ、論語その他の古典から引用した漢文が記されている。特徴的なのは、日本及び西洋の語句は全く挙げられておらず、すべて中国古典による点であり、「仰げば尊し」が初収録された『小学唱歌集』第三編と同時期にあたる明治17年頃に各地の小学校へ下賜されたものであるが、児童用教科書として普及したとは考えにくいとされている。『幼学綱要』において最も特筆すべき点は、二年前の教学聖旨⁸において、明治天皇が教学の要は本末を明らかにするところにあると述べたことを受けて編纂されたことにある。つまり『幼学綱要』に引用された『孝経』の文句〈立身行道挙名後世〉は、天皇の言葉そのものなのである。

それでは、国のお墨付きをもらった〈身を立て名をあげ〉は、子どものレベルでどの程度の広がりを見せていたのであろうか。以下に引用する明治21年3月5日発行、教育雑誌「教育時論」104号には、直接〈身を立て名をあげ〉の言及は見られないが、その大枠を掴むことは可能であろう。

我大阪府下に唱歌を実施するの日や尚淺し、故に其教授法も未だ試み中と云ふべし、……児童は歌詞の意を會得しがたく、従てその之が趣味を感ぜしむること能はざるべし。……此科の目的として、徳性の涵養を主とするからには、先づ其歌詞に就きて、……其由來を明らかにした後に、玉の宮居、雨露思ひ出れば、螢仰げば尊し等の歌詞を板書し……。〔稻垣秀三稿、「唱歌の教授」〕

上記から、明治20年代にいたっても唱歌教授法が確立されていないこと、歌詞を児童がなかなか理解することができなかったこと、を讀みとることができる。このことから、現代では唱歌を教授するにあたって、文語体で児童が理解しにくいとされることが多数あるが、実際は明治期の子どもにとっても同様に歌詞の意をとらえることは、困難であったことが指摘できる。しかしそれ以上に、

ここで注目しなければならないのは、たとえ盲目的にでも教師が子どもにく身を立て名をあげ＝「親孝行」という図式を教え込んでいたという事実である。そのことと、「仰げば尊し」に込められたテーマを考え合わせると、たとえ盲目的であったにせよ明治期の子どもたちにとっては、く身を立て名をあげ」ということは、「師の恩」であり「告別」であり、そして「イキル」ことに他ならなかったのである。

3 戦後の「音楽」教科書における「仰げば尊し」

3.1 戦後の「音楽」教科書の分析対象と内容

それでは、明治期の子どもたちにくイキル」ことを焚き付けた二番の歌詞は戦後の「音楽」教科書において、いつ頃から削除されたのか。今日考えられているく身を立て名をあげ」＝「立身出世」という図式に付与されるマイナスイメージはいつ頃から発生したのか、という問題が生じてくる。そこでこの章では、戦後の音楽教科書における「仰げば尊し」の掲載・形態の動向を探るため、「名古屋市教育センター」にて実施した調査報告とその分析・考察を行う。

なお以下に挙げる「表Ⅰ」は、調査対象とした「名古屋市教育センター」所蔵の小・中学校の卒業学年にあたる「音楽」教科書であり、表中の黒太数字は「仰げば尊し」が掲載されている「音楽」教科書にあたり、発行者の「二葉」は昭和26年度に改称された名前でありそれ以前は「二葉図書」、「講談社」は昭和35年度より改称された名前でありそれ以前は「大日本雄弁会講談社」を指す。また、これら発行者の他に、大阪書籍、中等学校教科書→中教出版、春陽堂→春陽堂教育出版、全音楽譜出版社→全音教科書→全音楽譜出版社、国民図書刊行会、広島図書、新興楽譜出版社、大阪開成館、好学社、春潮社がある。

表Ⅰ 音楽教科書一覧（「名古屋市教育センター」所蔵）

小学校6年「音楽」教科書 発行者・検定年	
日本書籍	昭35
東京書籍	昭31・35・39・48・51・54・57・60・63・平3・7・11・13
学校図書	昭31・34・35・39
二葉	昭27・33・35
教育出版	昭27・33・48・51・54・57・60・63・平3・7・11・13
教育芸術社	昭27・29・31・32・35・39・42・45・48・51・54・57・60・63・平3・7・11・13

音楽之友社	昭31・33・35・42・48・51・54・57・60・63・平3
音楽教育図書	昭35・39・48
中学校3年「音楽」教科書 発行者・検定年	
東京書籍	昭31・40
二葉	昭33・34
教育出版	昭28・32・36・40・43・46・49・52・55・58・61・平元・4・13
教育芸術社	昭31・40・49・52・55・58・平元・4・8・13
講談社	昭36
音楽之友社	昭29・33・36・43・55・58・61・平元・4
音楽教育図書	昭36・40・46

3.2 戦後の「音楽」教科書における二番の歌詞

戦後の「音楽」教科書において、「仰げば尊し」の掲載率（表I参照）は、小学校用（6年生）では96.9%、中学校用（3年生、平成4年に検定を受けたものから2・3下）では92.7%、と歌曲としての人気の高さがうかがえる。

表Ⅱ 「仰げば尊し」掲載教科書一覧（「名古屋市教育センター」所蔵）

【小学校】						
発行者名	掲載教科書(1)	検定年	2番	掲載教科書(2)	検定年	2番
日本書籍	小学音楽 6	昭35	○			
東京書籍(1)	新しい音楽 6	昭31	○	新しい音楽 6	昭35	○
東京書籍(2)	新しい音楽 新編 6	昭39	○	新しい音楽 新訂 6	昭48	○
東京書籍(3)	新しい音楽 新編 6	昭51	○	新しい音楽 6	昭54	○
東京書籍(4)	新しい音楽 改訂 6	昭57	○	新しい音楽 新編 6	昭60	×
東京書籍(5)	新しい音楽 新訂 6	昭63	×	新しい音楽 6	平3	×
東京書籍(6)	新しい音楽 新編 6	平7	×	新しい音楽 新訂 6	平11	×
東京書籍(7)	新しい音楽 6	平13	×			
学校図書(1)	音楽 6年	昭34	×	小学音楽 6年	昭35	×
学校図書(2)	小学校音楽 6年	昭39	○			
二葉(1)	音楽の本 6	昭27	○	小学音楽の本 新版 改訂 6	昭33	○
二葉(2)	音楽 6年	昭33	○	音楽 6年	昭35	○
二葉(3)	小学音楽 6	昭35	○			
教育出版(1)	小学生の音楽 改訂版 6	昭27	○	総合小学生の音楽 6	昭33	○
教育出版(2)	標準音楽 改訂 6年	昭48	○	音楽 新版 6年	昭51	○
教育出版(3)	小学音楽 6	昭54	○	小学音楽 改訂 6	昭57	○
教育出版(4)	小学音楽 新訂 6	昭60	○	小学音楽 改訂 6	昭63	○
教育出版(5)	音楽 新版 6	平3	○	音楽 6	平7	×
教育出版(6)	音楽のおくりもの 6	平11	×	音楽のおくりもの 6	平13	×
教育芸術社(1)	六年生の音楽	昭27	○	六年生の音楽	昭29	○
教育芸術社(2)	おんがく 6	昭31	○	おんがく 6	昭32	○
教育芸術社(3)	六年生の音楽	昭35	○	六年生の音楽	昭39	○
教育芸術社(4)	六年生の音楽	昭42	○	六年生の音楽	昭45	○
教育芸術社(5)	六年生の音楽	昭48	○	六年生の音楽	昭51	×
教育芸術社(6)	小学生の音楽 6	昭54	×	小学生の音楽 6	昭57	×
教育芸術社(7)	小学生の音楽 6	昭60	×	小学生の音楽 改訂 6	昭63	×
教育芸術社(8)	小学生の音楽 新編 6	平3	×	小学生の音楽 6	平7	×
音楽之友社(1)	音楽 改訂新版 小学6年生	昭31	○	小学生の音楽 改訂版 6	昭33	○
音楽之友社(2)	総合小学生の音楽 6	昭35	○	系統新しい音楽 6	昭35	○
音楽之友社(3)	音楽 新訂 6年	昭42	○	小学生の音楽 改訂新版 6	昭48	○
音楽之友社(4)	精選小学生の音楽 6	昭51	○	精選小学生の音楽 6	昭54	×
音楽之友社(5)	小学生の音楽 改訂 6	昭57	×	小学生の音楽 6	昭60	×
音楽之友社(6)	小学生の音楽 改訂 6	昭63	×	小学生の音楽 新編 6	平3	×
音楽教育図書(1)	統合版新しい音楽 6	昭35	○	統合版新しい音楽 6	昭39	×
音楽教育図書(2)	統合版新しい音楽 6	昭48	×			
【中学校】						
発行者名	掲載教科書(1)	検定年	2番	掲載教科書(2)	検定年	2番
東京書籍	新しい中学音楽 3	昭31	○	新しい音楽 新編 3	昭40	○
二葉	中学生の音楽 改訂 3	昭33	×	中学校音楽 3	昭34	×
教育出版(1)	標準中学生の音楽 3	昭28	○	最新中学生の音楽 改訂版 3	昭32	○
教育出版(2)	総合中学生の音楽 3	昭32	○	総合中学生の音楽 3	昭36	○
教育出版(3)	標準中学生の音楽 3	昭36	○	標準中学音楽 新版 3	昭40	○
教育出版(4)	標準中学音楽 新訂 3	昭43	○	中学音楽 新版 3	昭52	○
教育出版(5)	中学音楽 3	昭55	○	中学音楽 改訂 3	昭58	○
教育出版(6)	中学音楽 新訂 3	昭61	×	中学音楽 改訂 3	平元	×
教育出版(7)	中学音楽 新版 2・3下	平4	×	音楽のおくりもの 2・3下	平13	×
教育芸術社(1)	中学音楽 3	昭31	○	中学生の音楽 3	昭40	○
教育芸術社(2)	中学生の音楽 3	昭52	×	中学生の音楽 3	昭55	×
教育芸術社(3)	中学生の音楽 3	昭58	×	中学生の音楽 改訂 3	平元	×
教育芸術社(4)	中学生の音楽 2・3下	平4	×	中学生の音楽 2・3下	平8	×
教育芸術社(5)	中学生の音楽 2・3下	平13	×			
講談社	中学の音楽 3	昭36	○			
音楽之友社(1)	新中学音楽 改訂版 3	昭29	○	中学生の音楽 改訂 3	昭33	○
音楽之友社(2)	最新中学の音楽 3	昭36	○	中学生の音楽 新訂 3	昭43	○
音楽之友社(3)	精選中学生の音楽 3	昭55	○	中学生の音楽 改訂 3	昭59	○
音楽之友社(4)	中学生の音楽 3	昭61	○	中学生の音楽 改訂 3	平元	○
音楽之友社(5)	中学生の音楽 新編 2・3下	平4	○			
音楽教育図書(1)	新しい中学生の音楽 3	昭36	○	新しい中学生の音楽 3	昭40	○
音楽教育図書(2)	新しい中学生の音楽 3	昭46	○			

その中で、2番の歌詞を削除しているもの(表Ⅱ参照)は、小学校用では38.5%、中学校用では32.5%という結果になった。

更に年代順に見ていくと、小学校用では、昭和51年の教育芸術社を皮切りに2番の歌詞削除が行われ、昭和63年の段階では、ほぼ、全ての「音楽」教科書から2番の歌詞が姿を消している。中学校用でも同様な傾向がみられ、昭和52年の教育芸術社を皮切りに2番の歌詞削除が行われ、昭和61年の段階では、ほぼ、全ての「音楽」教科書から二番の歌詞が姿を消している。つまり〈身を立て名をあげ〉＝「立身出世」という図式に付与されるマイナスイメージは、昭和50年前後から発生したと考えていいのではないか。

3. 3 昭和50年前後の教育状況

それでは、二番の歌詞が「音楽」教科書から姿を消し始めた昭和50年前後に、〈身を立て名をあげ〉＝「立身出世」という図式に付与されるマイナスイメージがいかんして発生したのだろうか。この節では昭和50年前後の教育状況を見ていきながら、先の問いについての原因究明をおこないたい。

中学校卒業者のうち就職者が9.4%と初めて1割以下となった昭和48年、高校進学率が90%を越した昭和49、と受験競争に拍車がかかったこの時期は、政治と教育の論議が盛んに行われた時期でもある。特に昭和49年4月に35都道府県でおこった日教組・日高組の全日ストや共産党が『赤旗』に発表した教師論〈教師には聖職的な側面もある〉、それを翌月には教育労働者の観点から共産党が批判、この年の7月に行われた選挙の一争点となる。この翌年6月には、教育の正常化を掲げる「日本教育会」を小・中学校の校長会・教頭会が立ち上げ、8月には、文部省が初の学術白書『わが国の学術』を発表するなどの、戦後教育が盛んに見直され、昭和51年5月に、中央教育課程検討委員会(日教組)が〈ゆとりのある授業〉をめざし、総合学習、家庭・技術科の男女共修、授業時数の削減などを盛り込んだ、「教育課程改革試案」を公表した。こうした教師の質が問われ、受験競争が激化し、教育に〈ゆとり〉が求められた時期に二番の歌詞が「音楽」教科書から姿を消し始めたことを考慮すると、〈身を立て名をあげ〉＝「立身出世」という図式に付与されるマイナスイメージは、〈受験競争〉のイメージと合致するのではないかと考えられる。つまりそれが、現代の競争社会に生きる我々にとって「仰げば尊し」の主題の一つである〈イキル〉ことである、ということはいささか文学的すぎか。

結

以上「音楽」教科書における「仰げば尊し」、取り分け二番の歌詞の掲載形態を分析することで、〈身を立て名をあげ〉を中心に分析・考察してきた。本稿の目的は、唱歌「仰げば尊し」の歌詞部〈身を立て名をあげ〉を学校教育、取り分け「音楽」の観点から明治期と現代との比較対照を行い、「立身出世」という文化現象についての歴史の変遷を明らかにすることを目指すとともに、今日の学校教育のあり方を追求していくことにあったのだが、「仰げば尊し」の活動範囲としてある卒業式に関してはいっさい触れていないので、今後の研究課題とともにこの章で述べたい。

卒業式では、送られる側（卒業生）の歌としての「仰げば尊し」、送る側（在校生）の歌としての「蛍の光」が慣例としてあることにより、よく一対で考えられるが、その他の活動範囲は大きく異なる。「蛍の光」は年の終わり、客船の出航、閉店前等で耳にすることがあるが、「仰げば尊し」は学校儀式である卒業式に限定されている。現代の義務教育では、ほぼ、自動的に卒業式をむかえられるが、明治期の等級制、つまり落第の可能性がある教育制度にいた子どもたちにとって、「仰げば尊し」が歌えることは、そのまま卒業できたことにつながるものであり、そこで詠われている〈身を立て名をあげ〉は、現代の感覚では語りきれない何かがあるはずである。また卒業後にいかにして「親孝行」をするか、という問題も残されている。この問題は、学歴・職業・土地柄・家族制度・天皇制等、多方面からの考察が必要であろう。

さらに現代に目を移すなら、今日の卒業式では「仰げば尊し」は歌われているのかという疑問が残る。今日の「音楽」教科書では、〈互いにむつみし〉から始まる二番の歌詞は削除された形で掲載されているが、その二番は歌われているのだろうか。仮に歌われているならば、学校教育の「音楽」科と特別活動にある卒業式の関わりを考えるうえでも有意義な考察になるのではないか。

以上の問題意識を持ちつつ今後の研究課題とし、本稿を閉じることとしたい。

注

- i 〈情操〉という言葉は、戦前の日本の教育方針である「国民的情操の醇化」、つまり皇国民としての「徳性」や「高雅なる趣味」の涵養、「愛国の精神」

の昂揚を意味しており、子どもに特定のイデオロギーや価値観を植え付け、感情的に拘束する危険をはらんでいるという指摘がある。(吉富功修編『音楽科重要養護300の基礎知識』明治図書、2001、P19参照。)

- ii 『日本国語大辞典』(小学館、1974)。
- iii 山本文茂は、音楽科教育について、音楽と教育との関係、その目的や場による分類、その学的追求の基本構造などについて検討し、「音楽科教育とは、教科としての様々な音楽経験を介在として、児童生徒の音楽的成長と人間的成長を実現する過程である。」と定義付けている。(吉富功修編『音楽科重要養護300の基礎知識』明治図書、2001、P15参照。)
- iv 山住正己校注『洋楽事始』(平凡社東洋文庫、1971) P344—345。
- v 山住正己校注『教育の体系』(岩波書店、1990) P203—207参照。
- vi 同書の中で山住は、奥付に「明治14年11月24日出版権届」と記されているので、この11月に刊行されている教育史書に対し、修正の必要が生じ、実際に発行されたのは翌15年4月であると指摘している。
- vii 新釈漢文大系35『孝経』(明治書院、1986) P 67—88参照。
- viii 『楽石自伝教界周遊前記』(1912・5)の「遊子無限の恨」から引用。
- ix 小池滋『英国流立身出世と教育』(岩波新書、1991) P 2—9。
- x 海後宗臣編『日本教科書大系近代編二 修身(二)』(講談社、1962) P685—686参照。
- xi 明治12年8月、西洋文明を積極的に取り入れて文明の修正を、天皇の名によって求めた文章。
- xii それ以前に「学校図書」があるが、発行期間が短いため度外視した。

参考文献

- 岩井正浩『子どもの歌の文化史』(第一書房、1998)。
 小川太郎『立身出世主義の教育』(黎明書房、1957)。
 金本正武編『改訂 小学校学習指導要領の展開(音楽科編)』(明治図書、1999)。
 現代のエスプリ NO.118「立身出世」(至文堂、1977)。
 竹内洋『立身出世主義』(NHKライブラリー、1996)。
 竹内洋 日本の近代12『学歴貴族の栄光と挫折』(中央公論新社、1999)。
 竹内洋『立志・苦学・出世』(講談社現代新書、1991)。
 中学校音楽科教育実践研究会編『改訂 中学校学習指導要領の展開(音楽科編)』(明治図書、2000)。

坪井由美他編『資料で読む教育と教育行政』（勁草書房、2002）。

廣田照幸『陸軍将校の教育社会史』（世識書房、1998）。

堀内敬三他編『日本唱歌集』（岩波文庫、1958）。

宮野モモ子他編『小学校 新学習指導要領Q & A（音楽編）』（教育出版、1999）。

山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』（東京大学出版、1967）。

E.H.キンモンズ『立身出世の社会史』（玉川大学出版部、1995）。

Ping-ti Ho『科挙と近世中国社会』（平凡社、1992）。

